
象さんのお話し

ウルトラヤース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

象さんのお話し

【著者】

Z2689D

【作者名】

ウルトラヤース

【あらすじ】

象さんと可愛い女の子の恋のお話です。絵本用に書いたショート・ストーリーです。

夏休みにお婆ちゃんの家に遊びに行つた私に、夏の暑い日差しを浴びながら、田舎の家らしい縁側で、お婆ちゃんがお話をしてくれました。

昔々の象さんの鼻は、今のように長くはありませんでした、そして耳も今のように大きくはありませんでした。

ある日のこと、象さんは可愛い女の子に恋をしました。象さんの可愛い目に、その女の子も好意を持って、二人は毎日会うようになりました。

象さんは、女の子を背中に乗せ、あちこち遊びに行つたり、一人のことを話し合つたりして、楽しい日々を過ごしていました。

女の子が象さんに言いました。

「どうして、象さんはそんなに可愛い田をしているの？」

象さんは、それに答えて

「君を、可愛いと思って見ているから、そつなるんだよ。」

「へー、そつなんだ、何だか嬉しい！」

たわいのない、二人の会話がその後も続きました。

その年の夏は、何日も雨が降ることが無く、日照りの続く厳しいものになりました。

日毎に、川の水が少くなり、池の水は枯れていきます。ある日のこと、もう田に見える範囲の水は全て無くなってしまい一面が砂漠のようになりました。

女の子は、乾いた唇で象さんに言いました。

「ねえ、喉が渴いたわ、水が欲しいのー！」

「僕も、欲しいにナビ、どうしようも無いんだよ。」

「あなたは、私を愛しているのでしょ？ だつたり何とかしてよ、お願い！」

「……」

象さんは、女の子に言われて、何とかしようと想い、前足で砂を掘り出しました。

1m程掘り起いすと、穴の底に、水が湧き出でました。

「ほら、水だよ。」

「わー、ありがとう。」

女の子は、象さんの愛情を感じました。

乾燥した日々は更に続き、もう一度位掘つても、水は出でこなくなりました。

「ねえ、もつと水が欲しいのー。」

「僕も、欲しいけど、今度はどうしようも無いんだよ。」

「あなたは、私を愛しているのでしょ？ だつたり何とかしてよ、お願い！」

「……」

象さんは、女の子に言われて、また何とかしようと想い、前足で更に砂を掘り出し、自分の体が完全に埋まつてしまつてしまつて、その底に水を発見しました。

でも、気付いたときには、自分が這い出すことが出来ない状態で、女の子に水を渡すこともできませんでした。

そこで象さんは、神様に頼みました。

「神様、私はここから出られなくても良いですから、彼女に水を渡すことが出来るようにして下さー。」

その象さんの願いが、天に通じたのか、見る見る間に象さんの鼻が長くのびて、足下にある水を、彼女に渡すことが出来るようになります。

水を飲みながら、女の子が象さんに言いました。

「どうして、象さんはそんなに鼻が長くなつたの？」

象さんは、それに答えて

「君を、愛しているから、そうなつたんだよ。」

「へー、そつなんだ、何だか嬉しい！」

その後も、熱い乾燥した風のない日が続き、少女は熱射病にかかりそうになつていきました。

象さんは、水を汲んで上げることは出来ても、少女の熱射病を防ぐことが出来ませんでした。

そこで象さんは、神様に頼みました。

「神様、私はここから出られなくとも良いですから、彼女の熱射病を治すことが出来るようにして下さい。」

その象さんの願いが、天に通じたのか、見る見る間に象さんの耳が大きくなつて、穴の中から、彼女に涼しい風を送ることが出来るようになりました。

水を飲み、涼しい風に当たりながら、女の子が象さんに言いました。

「どうして、象さんはそんなに耳が大きくなつたの？」

象さんは、それに答えて

「君を、愛しているから、そつたんだよ。」

「へー、そつなんだ、何だかとても嬉しいー！」

やがて、熱い熱い夏が過ぎ、少しづつ涼しくなりました。

空がにわかに曇りだしたかと思うと、今までの天気が嘘のよう、ザーッ！と雨が降り出し、山から川が出来、池にも水が貯まるようになりました。

喜ぶ女の子の下で、象さんは恐怖に怯えいました。

このまま雨が降り続くと、象さんの掘った穴にも水が一杯になつて、象さんは溺れてしまうかも知れないので。

そこで象さんは、神様に頼みました。

「神様、私をここから出して下さい。」

その象さんの願いが、天に届いたとき、雷鳴が響きわたり、大地を揺るがすような声が辺り一面に響きました。

「私は神だが、今のおまえの望みは、聞き入れられない。」

象さんは、それを聞いて

「神様、どうしてダメなのでしょう?」

「おまえは、私に一度の頼み事をした、そのどちらの頼み事にも、おまえは『私はここから出られなくても良いですから、・・・・・』と言いながら、望みを言ったではないか。」

「そうでした、私は神様に頼むときに、そのように言いました。」

そう言つて、象さんは神様への頼み事を諦めました。

（彼女のために死ぬのだから、本望だ！）と・・・。

その話を横で聞いていた女の子は、胸が締め付けられるような苦しみを感じ、気付かぬ間に、神様にお願いをしていました。

「神様、私はどうなつてもかまいませんから、象さんを助けて下さい！」

「ダメだーーそんなことしたら、僕の今までの願いが無駄なものになる！」

象さんは、叫びました。

でも時は既に遅く、女の子の願いは聞き入れられて、象さんは穴の中から出でてくることが出来ました。

その瞬間、象さんの入っていた穴に川の濁流が流れ込み、穴の側に立つていた少女を飲み込み、消し去つていきました。

「何と言つことを・・・！」

象さんは、悲しみに暮れ、涙は留まるとこを知らず、流れるばかりでした。

一週間の間泣き続けた象さんは、自分の望みばかり言つてた女子が、実は自分のことを心から愛してくれていたことに気付き、自

分の犠牲の上に相手の幸福を積み重ねることの不幸を知りました。

「私が死んでも良いから、相手を助けて！」という望みは、実は相手も殺すことだということに、思い至ったのです。

「一人が、仲良く生きることが出来るのが大事で、そのためにはお互いが我慢し会つことも大切なんだ。」と。

涙も枯れ果てて、体中の水分が出てしまったようになつた象さんは、少女を飲み込んだ川伝いに歩き、ある湖の畔に立ちました。湖面に映つている自分の姿を見て、象さんはビックリしました。そこには、長い鼻も大きな耳も無い、優しい目だけが印象的な男の子が立つていたのです。

秋の風が湖面を揺らし、波立つた後、鏡のように景色を映し出す湖面をもう一度のぞき込んだ男の子は、更に驚きました。

そこには、あの女の子が写つてているのです。

湖面から自分の斜め後ろに目を移すと、そこには紛れもない、あの女の子が立つていました。

「どうして、そこに！」

「びっくりした？神様が生き返らしてくれたみたい。」

神様が、二人に愛の尊さと、お互いを大事にすることの意味、そして相手を信じる心の大切さを教え、それぞれに人生の再出発を与えてくれたのです。

その後の二人は、お互いを尊敬しあい、そして自分自身も相手のために大事にし、末永く幸せに暮らしました。

そんなわけで、恋する二人にいつまでもその時のことと思い出すことが出来るように、象さんの鼻は今でも長く、耳は今でも大きいままになっています。

キリンさんのお話は、又今度しましょうね・・・。

いつの間にか降つていた夕立が止み、遠くの山に虹が架かっていました。

ました。

その時、庭の生け垣から入つて来たお爺ちゃんの田^たが、ものすいへ
優しく思えたのは、お婆ちゃんのお話のせいでしょうか？

いいえ、その時私は、お爺ちゃんの口下にできてる陰が、象さ
んに似ていることに気がついていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2689d/>

象さんのお話し

2010年10月8日15時07分発行